

[005]ポリモルフィア表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/7343134>

出版情報：ポリモルフィア. 5, 2020-03-03. Office for the Promotion of Gender Equality, Kyushu University
バージョン：
権利関係：



The 28th International Association for Feminist Economics (IAFFE) Annual Conference

第28回国際フェミニスト経済学会大会参加報告

小川真理子

九州大学男女共同参画推進室 准教授

令和元年6月27日(木)28日(金)、29日(土)の3日間、グラスゴーカレドニアン大学(イギリス、スコットランド)にて、国際フェミニスト経済学会(以下、「IAFFE」と記す)第28回大会が開催された。IAFFE設立の背景は、1990年にワシントンDCで開催されたアメリカ経済学会の分科会において、女性の経済学者らが中心となり新たな学会創設の機運が生まれたことによる。女性の経済学者らは、経済のジェンダー問題に取り組むことの難しさを話し合う中で、フェミニスト経済学への関心が高まり、同じ志を持つ者が集まり学会設立に向けて動き出した。IAFFEは1992年に非営利組織として正式に設立され、1997年には、国連の経済社会理事会に諮問的地位を有するNGOとして特殊諮問資格(special consultative status)を得、国際レベルでの「ジェンダーと開発」問題への提言等を行っている。64か国、約600人の会員を有し、多くは経済学者であるが、政治学者や社会学者、法学者、文化人類学者等他の分野の研究者をはじめ、学生、活動家、政策立案者、実務家も含まれている。IAFFE会長(2018年～)は、ロンドン・スクール・オブ・エコノミクス(London School of Economics and Political Science: LSE)の国際ジェンダー学部教授で経済学者のナイラ・

カビール氏である。また、IAFFEには創立メンバーの一人であり、ノーベル経済学賞受賞者(1998)でハーバード大学教授のアマルティア・セン氏をはじめ著名な経済学者や社会学者が会員となっている。経済的な課題をフェミニストの視点から分析、考察し、こうした視点を持つ経済学者をはじめ社会科学者を養成することを目的としている。

世界各国から40か国近くの研究者、国連関係者、学生、実務家、政策立案者、活動家をはじめ350名以上が参加した本大会は、「不平等の交差(intersection)における連帯と挑戦」をメインテーマに、1日目の午前中にオープニング・プレナリーが開催され、3日間で60個近い大小のセッションで構成された。

オープニング・プレナリーでは、グラスゴーカレドニアン大学学長の歓迎の挨拶の後、ナイラ・カビールIAFFE会長よりオープニングパネルが行われた。カビール氏は交差と不平等を理解する際には、権力の複層性や支配と抑圧がどのように行使されるのかを深く理解することが重要である点を強調した。続いて、マサチューセッツ大学アムハースト校教授のリー・バジェット氏、ウィットウォーターズランド大学講師のメラニー・サムソン氏、バックネル大学准教授のニーナ・バンクス

氏、アショカ大学教授のアシュイニ・デシュパンデ氏が登壇し、大会テーマに即し、現代社会における最も重要な課題の一つである、世界における所得と富の不平等の増大に関して「アイデンティティ」と「場所」に焦点をあて、発表が行われた。

主要な論点は次の通りである。様々な不平等に埋め込まれている、周辺化された社会的アイデンティティと特権的な社会的アイデンティティとの間の相互作用を考慮しながら、どのように不平等が深化し拡大しているのか、これらの交差は、世界中の人々や場所、市場、コミュニティに関連してどのように展開しているのか、また、互いの違いを越えて連帯を築くのに役立つ知見や経験は、将来にわたり「誰も置き去りにしない」ことにどのように貢献できるのか、である。

各登壇者からは、民族、人種、階級、ジェンダー、国籍、カースト、セクシャリティ等に関する実証的な研究を基に報告がなされた。各報告を通して、不平等に対して何をするべきかという議論からはじめると、不平等そのものを正確に理解出来なくなること、特に、周辺の及び特権的な社会的アイデンティティを理解するには、公平性の概念と関連付けて理解することが重要であることが言及された。マイノリティの中でも女性は、人種や民族、ジェンダー等が複層的に交差する中でマイナーな存在となる。このように構造的かつ言説的に消去されてきた存在を可視化し、そこに生じる特有の抑圧構造を捉える概念が交差である。しかし、様々な抑圧が交差する中においても、多様な領域、分野、実践を通して連帯すること、また、フェミニスト経済学者は常に自己批判的であることを自覚し、周辺化された人々の利益を守るために、交差的なフレームワークを援用しバイアスを

分析することが重要であることが示唆された。



写真1 オープニング・プレナリーセッション

1日目午後から3日目までの各分科会では、労働市場、資産、資本主義、世帯、社会経済政策、ケア労働、貧困、暴力等のジェンダー視点からの分析や研究成果が報告された。中でも、①「ジェンダー、資産、労働市場」、及び、②「世帯、ケア、アンペイドワーク（不払い労働）」、③「社会経済政策と対策」のテーマの分科会での報告が多くなされた。①の分科会では、発展途上国における若年女性の雇用と賃金、南インドの紅茶プランテーションにおける女性労働者の抗議運動、レバノンにおけるシリア難民のジェンダー分析、離婚と女性の経済的地位の分析、南アフリカの女性の非正規雇用における賃金のジェンダーギャップ、職場におけるセクシャル・ハラスメントの影響と対策等の報告があった。②の分科会では、年齢とジェンダーの交差における不平等の変化、職歴、年金、健康における国際比較、タジキスタンの男性の国外移動が農業における女性の雇用とエンパワーメントに与える影響、ブラジルにおける早婚が若年女性の教育に与える影響等の報告があった。③の分科会では、農業と女性のエンパワーメント、ジンバブエの子どもの教育到達度とHIVの

関係とジェンダーギャップ、貧困層の女性への資産移転とケパビリティへの影響、交差的分析から見えてくる健康のコスト効果及び価値の背後にあるもの、グアテマラにおける周辺化された女性の間の健康情報に対するリスク回避と多様性等の報告があった（写真2）。

各分科会では、会場の参加者との活発な質疑応答と議論が交わされた。IAFFEの特徴として、若手の研究者を育てようという意識が会員に浸透していることがある。まだ国際学会大会に慣れていない若手研究者の発表に対して批判的な見解を示すのではなく、特にベテランの研究者からは示唆的で有益な助言が多くみられる。互いにエンパワーされるような関係性がバックボーンとしてあり、大会開催日の前日には、若手研究者向けにメンタリング等のワークショップを行っていることも大きな特徴の一つである



写真2 分科会

日本からは、お茶の水女子大学、学習院大学、福岡女子大学、法政大学、九州大学等の教員及び大学院生、また、日本学術振興会特別研究員等の約10人の参加者があった。九州大学からは小川真理子（男女共同参画推進室准教授）が参加し、2日目に2名の研究者とともに共通論題「実践に

におけるエンパワーメント：韓国、アメリカ、日本における女性政策と支援」の分科会を行い、パネル共同報告を行った。質疑応答の時間にはそれぞれの報告者への確な質問があり有意義な時間となった。

IAFFEは、ケア労働等のアンペイドワークの問題に取り組み、有給労働とアンペイドワークとの関係性を探求し、世帯内における権力関係を考察する等これまで経済学が見過ぎてきた問題をジェンダー視点から分析し着実に研究成果を積み重ねてきた。こうしたフェミニスト経済学の功績は、国際的にも承認され経済学分野全体の一角を占めている。

社会の変化が激しい中で、経済のジェンダー分析は、今後も重要な視点を提供してくれることを改めて認識できた大会であった。



写真3 開催場所のグラスゴーカレドニアン大学

注 本参加報告は、下記サイトを参考にして記述している。

[http:// www.feministeconomics.org/](http://www.feministeconomics.org/)

